三

翌日、磐音が宮戸川の仕事を終え、六間湯に立ち寄って金兵衛長屋に戻ってくると、着飾ったお兼に木戸口でばったりと会った。

「旦那、昨晩は造作をかけましたねえ。あたしもさ、あの子男の親分にまとわりつかれて、うんざりしていたんですよ。それを旦那が追い払ってくれた。清清してますのさ。今度ね、柳原の茶屋、新月に訪ねてくださいな。ちゃんとお返ししますから」

お兼はそういうとしゃなりしゃなりと出て行った。

磐音は堂々とした態度のお兼の瀬を言葉もなく見送った。

（この分なら長屋を出て行く気はなさそうだ）

「大したもんじゃないか」

どてらの金兵衛が家から出てきて、磐音に言いかけた。

「大家どのはお兼どのとお話になられたのですか」

「先ほど家に呼んで、昨日の一件を問い質した」

「で」

「で、へちまもないのさ」

金兵衛が顔を歪めた。

「長屋に押しかけた厩の三之助は客の一人にすぎない。昨夜いきなり押しかけてきて、引っ越しの磐音だと飲み食いを始めてどうにもならなかったというのだ。私も、客の一人と言うが若い衆が引っ越しを手伝っていたじゃないか、といってはみた。すると、あれは勝手に三之助が若い衆を手伝いに寄越しただけだと言い張ってな……」

おたねが木戸口に出てきて、

「大家さん、あまいんだよ。化粧っけのある茶屋女にさ」

と吐き捨てると井戸端に去っていった。

「おたねたちから総すかんだが、なんと理由をつけて追い出せばいいんだい」

磐音は金兵衛が陥った苦衷にいささか道場した。

「女たちはおこんをよんできて掛け合いをさせろうというが、そんなことができるもんか」

金兵衛のぼやきを背に長屋の木戸を潜った。

「旦那の働きも無駄になったねえ」

洗濯をしながら、おいちが磐音に言い放った。

磐音が曖昧に返事をして長屋の腰高障子を開けると、中居半蔵が黙然と座っていた。

「来ておられましたので」

「ちと厄介が生じてな」

朝早くから御直目付が直々に磐音の長屋を訪ねたのだ。厄介が出来したことは察しがついた。

「実高様の御身に何事か」

「いや、そうではない。どのはご壮健じゃ」

半蔵は懐から半紙を出して広げた。

それは吉原五十間道の蔦屋重三郎が、絵師の北尾重政に描かせた『雪模様日本堤白鶴乗込』だった。

「江戸で法番になっておるのをそなた承知か」

「はい。昨日、ちらりと見ました」

ふうっ

と半蔵が溜息をつき、

「情けない」

と吐き捨てた。

磐音は力なく呟いた半蔵を見た。半蔵がこのような表情を磐音に見せたのは初めてのおとだ。

「どうなされましたな」

「馬鹿者の藩士が町でこの浮世絵を購ってきて、藩邸じゅうに回したと思え。それをご家老の利高様がご覧になって、その者から事情を聞かれたようじゃ。江戸の話題をさらう白鶴が豊後関前藩の家臣の娘と教えられた利高様は、大いに憤激なされたそうな」

「…………」

「家臣の娘が遊里に身売りんされて話題を集めるなど、豊後関前藩の沽券に関わるとも申されたそうな」

「な、なんと」

「ご家老は、奈緒どのがなぜかような目に遭われたかに目を向けようともなさらず、関前藩の恥と吐き捨てられた。奈緒どのの身の上は豊後関前藩の家臣一同が招いたことだ、それを忘れてぬけぬけと……」

しばらく二人は沈黙に落ちた。

半蔵と磐音の胸中に去来するのは、かさこそとした。

「哀しみ」

であり、譬えようもない、

「情けなさ」

だった。

「利高様は仔細をご存知ないのでしょう」

「知らないで済まされるか」

「仕方がございませぬ」

磐音は他人の気持ちを理解するのは難しいと思いながら、

（父はなぜかような人物を江戸家老に推挙なされたか）

疑いの気持ちを胸に生じさせていた。

「坂崎、仕方ないでは済まぬ事態だ」

磐音が半蔵の顔を見た。

「ご家老は、このまま放置もできない、即刻、白鶴に会って策を取りたいと、吉原を訪ねられるそうだぞ」

磐音は返答も忘れて絶句した。

「なんのためでございます」

「ご家老は、豊後関前の恥をこれ以上、世間に広めない策を考えたいと申されたそうじゃ。だがな、それがしが推量するところ、華の吉原を訪ねたい、評判の白鶴を一目見ようという魂胆と見た」

「中居様、もしそのようなことが行われますれば、奈緒どのは自害して果てましょう」

奈緒は病の父を助けるために苦界に身を沈めることを決意したとき、城下の遊里だけは御免くださいと、肥前長崎に売られていく道を選んだのだ」

流転の末に江戸の吉原で遊女としてお披露目されたばかりのところへ、のこのこと賢しら顔の家中の者が現れ、安っぽい同情っと好奇の目を向けたとしたら、白鶴は、奈緒の身に戻り、身を処すると磐音は思った。

「やはりそなたもそう考えるか」

「利高様は、いつ吉原に出かけられるおつもりにございますか」

「早い機会にと申されておるようだ。だが、今をときめく白鶴を座敷に呼ぶのは至難の業とか。取り巻きの小此木平助と用人の棟内多門どのが丁子屋と折衝して、会える日を決めておるそうな」

小此木平助は、江戸藩邸の古狸と呼ばれ、普請役であった。多門は分家福坂利高の用人で、磐音は名前くらいしか知らなかった。

「どうなされます」

磐音の問に半蔵が、

「この一件ばかりは、そなたが決めたことに中居半蔵、一命を賭して従う」

と言い切った。

「ありがとう存じます」

磐音は半蔵の気持ちに素直に感謝すると、しばし考えに落ちた。

「なんとしても利高様を奈緒どのに合わせとうはございませぬ」

半蔵が承知したように頷いた。

「坂崎、諦めさせる策があるか」

「それがし、吉原に参り、丁子屋様に会ってみます」

磐音の頭には吉原郭内う差配監督する四郎兵衛のことが頭にあった。

「妓楼の主から断らせるのか」

「いえ、お招きの日取りを決めていただくのでございます」

「坂崎、どういうことか」

「中居様、多額の借財を抱えた豊後関前藩により、江戸家老は再建の要の人物にございます。そのお方が江戸に出てこられて、少々舞い上がっておられるようです。となれば、頭を冷やすよい機会かと心得ます」

「それがしがやることはなんだな」

「吉原に通う日時が決まりましたら、駿河台の藩邸から吉原に通う道筋を工夫していただけますか」

「先導の小者も乗り物を担ぐ陸尺も藩邸の者だ、道筋などどうとでもなる。寂しきところを通過させればよいのかな」

中居半蔵がにやりと笑った。

磐音が真面目なかおで小さく頷いた。

「心得た」

その昼下がり、磐音は吉原の五十間道を下っていた。すると左側の小さな店先に男たちが群がってなにかを買い求めていた。

間口二間に満たない小店は、『雪模様日本堤白鶴乗込』を上梓した蔦屋重三郎の店だった。

後に黄表紙、洒落本、浮世絵などと次々に話題をさらうことになる江戸の風雲児、地元問屋の蔦屋は、この小店で営業を始めたのだ。

去年、安永二年のこと、鱗形屋から発行される吉原細見の小売を始めたのが商いの最初だった。そして、この正月には、版元として初めての遊女評判記『一目千本』を出し、その勢いをかって、『雪模様日本堤白鶴乗込』を上梓していた。

磐音は田舎土産に浮世絵や吉原細見を買い求めた男たちの嬉しそうな顔を見て、大門を潜った。

吉原会所で四郎兵衛と面談して願いをした磐音が吉原の大門を出たのは、夕刻のことだ。五十間道、通称衣紋坂を土手八丁にあがる磐音は、刺すような視線を感じた。

豊後関前藩から抜けて足掛け三年余、雑多な稼ぎ仕事を繰り返してきた磐音だ。恨みを買う身であることは重々承知していた。

何事もないように土手八丁を今戸橋に向かいながら、辺りに気を配ってみたが、視線の主を見付けられなかった。

（気の迷いか）

磐音は気にしながら、御蔵前通りから神田川を浅草御門で渡り、両国西広小路に出た。今津屋の分胴看板が目に入ったが、まとわりつくような視線を考えて両国橋を渡った。

今津屋にとばっちりがかかっても困る。

その夜、大人しく金兵衛長屋に戻った磐音は飯を炊き、千切り大根の味噌汁を作って、残っていた生卵をその中に落として夕餉を食した。

井戸端では女たちが未だお兼のことを怒っていたが、亭主連は、なんとなくお兼がいてくれることを望んでいるふうがあった。

そのことがまた女房連の憤怒を掻き立てた。

ともあれ磐音は、触らぬ神にたたりなしとばかり、騒ぎに口を挟まないようにした。

夕餉の後、行灯の灯芯を掻き立てて、仲居半蔵に宛てた手紙を一通認めた。ついでに国許の父、正睦に書状を認めて近況を述べ記した。

翌朝、宮戸川に鰻を卸しに来た幸吉に駿河台の関前藩邸まで使いを頼んだ。中居半蔵に宛てた手紙を届けてもらうためだ。

幸吉は、駄賃を与えようとする磐音は、

「銭はいらねえよ。その代わり、おれとおそめちゃんをさ、奥山に連れて行ってくんな」

と、未だ果たされぬ約束を思い出させた。

「幸吉どの、すまぬ。このところ、野暮用ばかりが続いてな。近いうちに必ず果たすでな」

幸吉は頷くと承知した。

磐音は宮戸川の仕事の後、六間湯に立ち寄った。すると金兵衛が疲れた顔で湯に浸かっていた。

「坂崎さんか、女はつくづく怖いな。このところ立つ瀬がない」

「それはお困りですな。あとはおこんどのに口を利いてもらうしか道はございませぬか」

「おこんがあの女を追い払うのかね」

「いえ、おたねさん方の気を沈めてもらうのですよ。言われてみれば、お兼さんも厩の三之助親分の迷惑を蒙った一人ですからね」

「わしだからいいが、そんなこと長屋で言おうものなら、女たちの冷たい視線を浴びて、針の筵に座ることになるよ」

磐音は湯の中でぶるっと身を震わした。

江戸市中から北州の傾城、吉原の里に通う道は、大きく分けて四つあった。

一　舟で大川を上り、山谷堀の船宿から日本堤を行く道

一　駒形から馬道を大川沿いに歩いて日本堤に出る道

一　浅草寺裏から北へ日本堤に出る道

一　上野の山の東側を回って日本堤の西、三の輪へと出る道

磐音は、東比叡山寛永寺の東側、下谷車坂から伸びてきた坂本村の田んぼに腰を下ろして待っていた。

刻限は寛永寺の時鐘が五つを打ったばかりだ。

磐音の背後には、筑後柳川藩立花家の下屋敷と伊予新谷藩加藤屋の上屋敷があって、二つの間から不夜城、吉原の明かりがぼおっと見えた。

足音がばたばたと響き、

「坂崎、どこにおる」

という中居半蔵の声がした。

「こちらにございます」

磐音が立ち上がると息を弾ませた半蔵が寄ってきて、

「陸尺によう言い聞かせておいた。もうすぐここに差し掛かるぞ」

「ならば、ご用意を」

磐音は、二丁町の衣装屋から借り受けてきた白装束の一組をはん蔵に渡した。

「なにっ、おれも扮装をするのか」

「それがしと中居様の二人芝居にございますれば、やはり衣装は身につけていただきませぬと」

二人は、白小袖に白の袴を着け、さらに白塗りの狐の面を被った。手には袋竹刀を握り締めて、待った。

「供は何人でございますな」

「小此木平助と棟内多門ら四人じゃ。小者や陸尺たちはおれが言いくるめておいた、なんの抵抗も見せずに逃げる素振りを見せよう」

「中居様、利高様を懲らしめなさいますか」

「いや、そちらはおぬしに任せた。それがしは、おべんちゃら屋の小此木らを打ちのめしてくれる」

中居半蔵が袋竹刀を一振りした。

先導の提灯は豊後関前藩の家紋、鶴の丸が見えた。

「おおっ、あれが名高き吉原の明かりか」

多門の声が響いた。

磐音は中居半蔵が行列の後ろに回ったのを確かめ、田圃の暗がりから畦道に飛び出した。

「わああっ」

中居半蔵に意を含められていた先導の提灯持ちが逃げ出した。すると陸尺たちも乗り物をその場に投げ出して、今来た道を走り戻った。

残されたのは、乗り物の中の福坂利高と小此木平助ら四人の供侍だ。

小此木がそれでも刀の柄に手をかけて前後に立つ白狐を見た。

「われらは、吉原田圃にすまいをなす古狐、どちらに参るな」

「ご、御用にて通るだけだ」

磐音の問に震える声で小此木が応じた。

「この先は吉原があるばかり。どこぞの藩中と覚えるが、勤番をないがしろにして吉原に通いとは、よき身分かな」

「だ、黙れ！ふざけた真似をいたすと捨て置かぬぞ」

ふいに中居半蔵が動いた。

「天に代わって懲らしめようぞ！」

袋竹刀を振るって四人の供の間に躍り込んだ。するとなんとも情けないとに、四人は刀をぬこうとすらせず逃げ惑った。

「おのれ、なに奴か」

乗り物の戸が開かれ、剣を片手に福坂利高が姿を見せた。

「陪臣の本分とはなんぞや」

磐音の問に、

「吉原に巣食う狐なんぞに武家の心得を教わる要はない」

いきなりぬきつけた刀で磐音狐の面を襲った。

ひらりと躱した磐音が袋竹刀を利高の額に、

と打ち付けた。

「あ、痛いたた」

それでも利高は刀を振り回した。

磐音の袋竹刀が利高の足を、腰を、次々に打ち据えて、

「おのれ、おのれ」

と言いながら剣を振り回していた利高が畦道にへたり込んだ。

磐音は、中居半蔵に合図を送ると闇に姿を没しさせた。

二人は、騒ぎがあった場所から半丁ほど離れた小屋の陰に走りこむと、様子を窺った。

逃げ惑っていた小此木らが投げ捨てられた乗り物のそばに戻り、様子を見守っていた小者や陸尺を呼び寄せた。

「ご家老、お怪我はございませぬか」

「ば、馬鹿者。そのほうら、なにをいたしておった」

「いえ、手ごわき相手に必死で剣を」

「お、おのれらは」

「どうなされますか。このまま吉原へ向かわれますか」

「このような面体で遊里に参られようか。藩邸に戻る」

利高の声が響き、行列を整え直した一行はくるりと向きを変えて、江戸市中に戻っていった。

「坂崎、無性に哀しくなった。藩の再建などできるのであろうか」

中居半蔵の問いに磐音は答える術を持ち得なかった。